

戦争の本質と

石津朋之編

軍事力の諸相

彩流社

戦争の本質と軍事力の諸相

2004年2月25日 発行

定価はカバーに表示してあります

編 者 石 津 朋 之

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-2-2

電話 03(3234)5931 Fax 03(3234)5932

<http://www.sairyuusha.co.jp>

e-mail sairyusha@sairyusha.com

印刷 (株) 平河工業社

製本 (有) 青木 製本

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

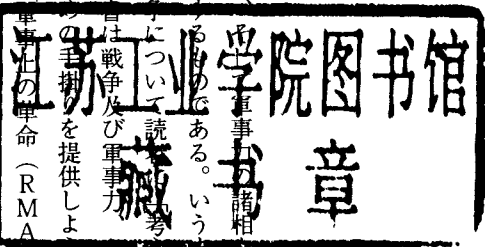
ISBN4-88202-860-3 C0031

はじめに

本書の目的は、第一に戦争の起源及び本質、**軍事上の革命**と多角的に考察することにより、人類の大きな社会的営みの一つである戦争の実像に迫ろうとするものである。いうまでもなく、戦争に関して書かれた文献の数は膨大なものになるであろうが、そのなかで、戦争について読者（考査させる）ものとなると意外と少ないのが実状であらう。そこで本書の第二の目的として、本書は戦争及び軍事力（考査させる）さらには政軍関係に関する最先端の議論を紹介することにより、読者が戦争について考えるための手掛りを提供しようとするものである。

また本書には、昨今、注目を集めている「**軍事上の革命（RMA）**」に関する論文が三本収められている。これは、本書出版の第三の目的に関連している。すなわち、戦争や軍事力といったものが、いかに社会・政治と密接に関連しているかを読者に示したかったのである。さらに本書には、日本の防衛政策に関する論文も収められているが、これは第四の目的、すなわち、戦争及び軍事力について読者に自己の身近な問題として考えてもらいたいからであり、また同時に、将来の日本の防衛政策に対して何らかの提言ができればと考えたからである。我々の希望が少しでもかなえられれば幸いである。

なお、本書で用いる用語についてであるが、例えばRMAを「**軍事上の革命**」と訳出する論文もあれば、「**軍事における革命**」とするものもある。これは、未だに一般に認められた定訳がないためであるが、本書では、あえて訳語の統一をしなかった。というのは、本書の執筆者はそれぞれ、原語の意味をもつとも的確に表現していると思われる



訳語を用いているからである。また、いうまでもなく、各論文の内容は執筆者の個人的見解であり、執筆者が属する組織の見解を代表するものではない。なお、巻末には読者が戦争研究を進める上での参考文献を掲載している。有用であれば幸いである。

第一章「戦争の起源と本質をめぐる試論」(石津朋之)では、戦争の起源をめぐるトゥキディデスの「三要素」、すなわち「利益」「恐怖」「名誉」を手掛りにして、なぜ戦争が生起するのかについて考察される。ここでは、クラウゼヴィッツ的戦争観に対する厳しい批判が展開されるであろう。

第二章「軍事力の有用性」(マーチン・ファン・クレフェルト、立川京一監訳)は、一九四五年以降に生起した軍事力の功罪に関する諸事象を効果 (effectiveness) という観点から評価しつつ、(一)核戦争、(二)通常戦争、(三)国家が非国家組織を相手に遂行する準通常戦争、(四)非国家組織が国家を相手に遂行する準通常戦争のそれぞれについて論じ、このうち今日も有用性を保持しているのは最後の非国家組織が国家を相手に遂行する準通常戦争のみであると結論づけている。

第三章「政軍関係の過去と将来」(長尾雄一郎)は本書のために書き下ろした小論である。そこで議論されていることは極めて単純な論点である。すなわち、従来、政軍関係論において問題とされてきた事柄、例えば、軍が政治過程で大きな影響力を振るうようになることやクーデターといったものは、一九二〇世紀の国民国家に特有の政治現象であったことを、階級政治の存在を中心に論じている。このことは将来の政軍関係を見るときに大きな含みを持つはずである。我々はややもすると、過去の軍の行いを参照基準にして、現在の軍を見がちであるが、このことは、別の過ちをもたらす可能性があるからである。

第四章以下の三つの論文は、軍事力の様相に関する具体的な考察である。第四章「戦間空間の外延的拡大と軍事力の変遷」(長尾雄一郎、石津朋之、立川京一)では、戦間空間の外延的拡大という概念を基調にして、陸・海・空それぞれの軍種の歩みを概観するとともに、昨今、注目を集めている非通常戦争及び「軍事上の革命」について、さら

には、軍種の統合問題について言及される。本論は、戦争の将来像を見極めたうえ、軍種の統合を強く主唱したものである。

第五章「核兵器の意義と課題——過去と将来」（小川伸二）では、核兵器が、核保有国が互いに非脆弱な報復能力を備えるという一定の条件を満たす限りにおいて、戦争を防止する効果を生み出すことが示される。しかしながら、そうした条件を満たし続けることは容易でなく、そうだとすれば、核兵器の削減、そして究極的には廃絶を追求しなければならぬと著者は論じる。だが、核廃絶の見通しは立っていない。しかも核廃絶後の世界が戦争のない安定した世界になる保証もないのである。したがって、本論は、残された途は、核兵器の役割を、可能な限り国家の安全保障を担保する究極的手段とすること、他の核保有国の核使用を抑止することの二点に絞り込めるような安全保障環境を構築することにあると主張するものである。

続く第六章「非通常戦——国家と武力紛争の視点から」（長尾雄一郎）のもととなっているのは、二〇〇一年一月に東京で開催された防衛庁防衛研究所主催の安全保障国際シンポジウムでの報告論文である。第四章「戦闘空間の外延的拡大と軍事力の変遷」と重複する部分があるが、二〇〇一年から二〇〇二年にかけて同章を執筆している最中に、この安全保障国際シンポジウムにおいて発表する機会が与えられ、同章の一部を使って報告したため、重複することとなったものである。しかし、今回の本書出版の機会を得て、イラク攻撃問題など、その後の事態の推移を考慮に入れて初出報告論文の後半部分を大きく改訂した。本論は、近代国家成立以降の戦争史のなかにおいて非通常戦を位置付けようとする試みであり、いわゆる「破綻国家」や「ログ・ステート」、国際テロリズムへの対応が課題となるなか、今後は「ある種のウェストファリア体制の強化」が求められ、そのため国軍の役割は重要となり、非通常戦の比重が高まることを論じたものである。

第七章以下の三つの論文は、「軍事上の革命」について異なる視点から論じたものである。昨今、米国を中心に「軍事上の革命（Revolution in Military Affairs: RMA）」をめぐる論争が活発になっているが、第七章「軍事革命」と

『軍事上の革命』のあいだ——歴史研究の視点から」(石津朋之)は、この「軍事上の革命」が真の意味での「軍事革命(Military Revolution)」と呼ぶに相応しい現象に発展する可能性があるか否かを考察するため、過去の「軍事革命」を概観し、歴史研究の立場からその手掛りを得ようとするものである。本論では、著者が描く「軍事革命」のイメージが提示されている。すなわち、「軍事革命」とは第一に、ある一つの技術的發展や新たな軍事戦略・戦術が軍事力全体を飛躍的に強力なものに変えることが不可欠である。第二に、この軍事力を用いた戦争の結果が、国内社会や国際関係における大きな政治的枠組みの変化を伴うことが挙げられる。第三に、「軍事革命」は、政治的枠組みの変化を伴うだけに留まらず、より広義の社会の変化、すなわち、価値観・社会規範といった新たな「時代精神」を生み出すほどの事象を指した包括的な概念でなければならないというものである。

第八章「RMAと国際安全保障」(加藤朗)では、農業社会から工業社会への社会構造の転換に伴い、道具としての兵器による農業社会の限定戦争や宗教戦争が、機械としての兵器による工業社会の大量破壊の国家総力戦や政治イデオロギー戦争へと変化したと論じられる。同様に著者は、機械としての兵器からIT革命による装置としての兵器への転換も情報RMAとして、情報社会の戦争の形態を大きく変容させており、その変容は、戦争の倫理化、管理化、脱国民国家化そして仮想現実化であると主張する。IT革命に基づく装置としての兵器は、情報RMAを引き起こすと同時に、有機体的自然観に基づく情報社会の新たな安全保障戦略を我々に求めている。具体的には勢力均衡概念に代わる新たな秩序概念である。その一つとして、著者は華夷秩序の現代的再考の可能性を指摘する。

前述したように、インターネットの普及によって引き起こされている社会の変化に端的に現れているように、急速な展開を見せている情報革命は、人間社会のさまざまな分野を変革している。第九章「RMAと日本の防衛政策」(高橋杉雄)は、そのような現象は軍事においても例外ではなく、特に一九九一年の湾岸戦争以降、米国を中心として軍事力に情報技術が活発に導入されてきたと主張する。そして、それは今後日本にも大きな影響を及ぼすこととなるだろうと結論している。

第十章は、第九章とともに戦争及び軍事力の変化と日本の対応について論じたものである。第十章「変わりゆく戦略環境と日本の防衛政策」(道下徳成)は、冷戦期、日本は領域防衛を基本としながらも対ソ封じ込め政策に寄与し、国際安全保障上の責務を果たしたが、冷戦後は領域防衛と国際安全保障への貢献をリンクさせることが困難になったため、代わりに平和維持活動などの国際貢献を活発化させたと主張する。また、同時に日本は脅威の多様化・低強度化への対策を講じた。だが、今後、日本が本格的に国際安全保障に貢献していくためには、域外におけるミサイル防衛や米国との「役割と任務」分担に取り込む必要がでてくると論じられている。

本書に収められた論文は、第三章と第十章を除き、すでに発表されたものを、その後の情勢変化及び研究動向を踏まえて大幅に加筆・修正したものである。これらの論文はいずれも、発表直後から大きな反響をよんだものばかりであり、今回、彩流社の竹内淳夫氏のご好意で一つのまとまった書として出版させていただく運びとなった。このような機会を与えて下さった竹内氏には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、それぞれの論文を執筆するにあたり、防衛研究所所長をはじめ、多くの先輩・同僚諸氏の協力を得ることができた。あわせて御礼申し上げます。

執筆者を代表して

石津朋之

(付記)

長尾雄一郎氏は、二〇〇三年九月一日、国際会議出席のため滞在中のワシントンで急逝された。執筆者一同、ご遺族に謹んでお悔やみ申し上げます。

目次／戦争の本質と軍事力の諸相

はじめに.....	石津朋之	1
-----------	------	---

第一部 戦争の本質、起源、そして軍事力

第一章 戦争の起源と本質をめぐる試論.....	石津朋之	15
はじめに		16

- 一 国際政治学・歴史学と戦争の起源 19
- 二 心理学（精神分析学）・生物学（動物行動学）と戦争の起源 28
- 三 国家と戦争の起源 34
- 四 トウキディデスの「三要素」と戦争の起源 36
- おわりに 52

第二章 軍事力の有用性.....	マーチン・ファン・クレフェルト（立川京一 監訳）	59
はじめに		60

第五章

核兵器の意義と課題——過去と将来……

小川伸一

181

- 三 海軍力——サラミスの海戦から「DDX」まで 125
 - 四 空軍力——エア・フォースからエア・パワーへ 136
 - 五 非通常戦争 158
 - 六 統合運用と「軍事上の革命（RMA）」 169
 - おわりに——何が日本に求められているのか 178
- 一 はじめに 182
 - 二 核兵器と戦争防止 183
 - 三 核兵器の「周辺化」と使用規制の強化 188
 - 四 おわりに 194

第六章

非通常戦——国家と武力紛争の視点から……

長尾雄一郎

197

- 一 はじめに 198
- 二 非通常戦とは何か 198
- 三 国家間の戦争——人間の原罪の罫い込み 199
- 四 二〇世紀の武力紛争 204
- 五 政治社会の変化 207
- 六 国軍と非通常戦 219

第三部 軍事革命と軍事上の革命（RMA）

第七章 「軍事革命」と「軍事上の革命」のあいだ——歴史研究の視点から……………石津朋之 225

はじめに 226

一 「軍事革命」をめぐる問題点 226

二 「軍事革命」としての「ナポレオン戦争」 230

三 「軍事革命」と新しい「世界像」 233

四 「軍事上の革命」について 238

おわりに 244

第八章 RMAと国際安全保障……………加藤 朗 245

はじめに 246

一 RMAの技術決定論 246

二 RMAの社会決定論 249

三 装置としての兵器と安全保障 256

おわりに 262

第九章 RMAと日本の防衛政策……………高橋杉雄 265

はじめに 266

一 情報RMAとはなにか 266

二 情報RMAをめぐる論争 274

三 情報RMAと日本の防衛政策 278

おわりに 283

第四部 戦争の将来と日本の防衛政策

第十章 変わりゆく戦略環境と日本の防衛政策

道下徳成

287

一 冷戦の終結と日本の防衛政策 288

二 日本の防衛政策の将来像 296

三 正解のない問題への取り組み 306

参考文献

初出一覧

索引

執筆者略歴

1 3 319 309

第一部 戦争の本質、起源、そして軍事力

第一章 戦争の起源と本質をめぐる試論

石津朋之